愛知淑徳大学論集　第11号　1986

二言語環境の幼児の言語発達

——レオポルドの観察をめぐって——

小　林　素　文

1．たとえば，父親がドイツ語，母親が英語といった，異なった言語を話す環境の中で幼児が生まれた時から育てられていく時，その言葉の発達はどのようになって行くのであろうか。

アメリカの著名な言語学者，レオポルド（W. F. Leopold）の娘ヒルデガード（Hildegard）がまさにこの例である。彼女は，母親からは英語を，父親からはドイツ語という環境の中で，生まれた時から育てられていった。家族は大部分をアメリカ合衆国の中で生活をしていった。レオポルドは英語とドイツ語の二言語併用者であったが合衆国に生活の基盤を置いていた関係上，日常生活においては英語を用いることがほとんどであった。しかし，強靱な意志をもって娘のいるまえでは必ずドイツ語を話していった。それはヒルデガードが7歳になるまで続けられていき，その成果は Speech Development of a Bilingual Child という4巻の本となって出版された。その中で，ヒルデガードの2歳までの言語発達が克明に述べられてある。

レオポルドの論文は1949年に発表されたが，2言語環境の幼児の観察が言語学者の父親の立場からこのようにきめ細かくしかも大部にわたってなされたことは，それまでにもなかったし，その後もでてきてない。本稿においてはレオポルドの観察をまず簡単に紹介し，これに現代の言語発達の理論からの解釈をほどこし，2言語環境の幼児の言語発達の普遍性を探っていきたい。

2．二言語環境の幼児の音声面の発達については，2つの言語の中にいるわけであるから，当然，1つの言語の中にいる幼児と比較すればより多くの音を発するようになると思われよう。所が，レオポルドの観察はこれを裏ずけるものではない。

> Hildegard had already a wider experience, with varieties of sounds than monolingual children. Actively, however, her sound system scarecely exceed that of monolinguals.....Both sounds were introduced into words coming from both languages. Each might have occurred if Hildegard had been exposed to only one language![1]

ヒルデガードは聞く側では一言語環境の幼児より多くの音にかこまれより広い経験をしてきた。

しかし話す側では彼女の音の体系は単一言語環境の幼児の体系をこえることはほとんどなかった……英語の音がドイツ語の単語に，ドイツ語の音が英語の単語に入ってくることはあったが，そうしたことはたとえヒルデガードが単一言語環境にいたとしてもおこりうることである。(筆者訳。以下同じ)

つまり，ヒルデガードは一言語環境の幼児よりも，多くの音を発声していなかったことが観察されているわけである。

つぎに，二言語環境の幼児の一語文あるいは二語文については，幼児の段階では二つの言語体系にいるという認識を持つことは無理であり，混乱をおこすのではないかと考えられよう。レオポルドの観察は真にそれを裏ずけるものである。

She chose words from both languages as carriers of her communication, and combined them into utterances..... She was the sole arbiter of her choice, which favored now one language, now the other, with shifts of emphasis due to linguistic environment, but never entirely determined by it.(2)

彼女は，何かをつたえようとして，両言語から単語を選び，それをつなげて発話をする。彼女だけがその選択を左右するものである。(以下略。)

つまり，一語文については，二言語の語彙を用いるが，必ずしも父親にドイツ語，母親に英語ということはなかったことが観察されたということであり，二語文については，彼女の発話の中には，例えば，all nass/no mehr といったような英語とドイツ語の混成形態 (hybrid system) が表われたということである。

二言語環境に育った幼児が，単一言語環境に育った幼児とは異なる言語上の特性を有するとき，これを二言語環境特性とよぶならば，レオポルドの以上の観察からつぎのようにまとめられよう。ア．発音の面においては二言語環境特性は表われない。2．二語文については混成形態という二言語環境特性が表われる。

しかし，この観察は表面的なものであり，最近の言語発達の理論からは別の解釈がなされうる。つまり，二言語環境の特性は発音の面で表れないのと同様に二語文の混成形態においても表われないのである。このことを以下において明らかにしていきたい。

3．幼児の言語発達は，従来は，赤ちゃんはものまね上手で，何でも上手にものまねをしてしまうといわれ，そこから「赤ちゃんのように自然に英語をおぼえましょう」という広告に表われるように，大人の外国語習得の見本とすらされているほどである。確かに幼児は模倣が得意

なのは事実であるが，はたして何でも上手にものまねができるのであろうか。

筆者の家は飛行機の航路となっており，よく飛行機が通過するのだが，子供が二歳の時，空に飛ぶ飛行機を指差して私が「ヒコーキ，ヒコーキ」と何度繰返しても，子供はじっと空をみているだけであった。しかし，つぎに来た飛行機を指差し「ブーン，ブーン」というと，それをまねて「ブー，ブー」といった。このことは幼児のものまねが上手なのは確かであるが，何でも上手なわけではなく，自分のできる範囲のものまねの天才であることをものがたっている。

表1[3]

Adult word	Paul
"laugh"	[læp]
"off"	[ɔp]
"coffee"	[kɔpi]

同様のことは英語環境の幼児にもいえる。英語環境に育ったアメリカ人の二歳児，ポールは，日本語にはない／f／音を絶えず聞いているのであるが，それをそのままものまねすることなく，そこから／p／音を発声するのである（表1）。

表2[4]

Adult word	Paul
"snake"	[nek]
"sky"	[kay]
"stop"	[tap]

つぎに，英語の音節構造は日本語とくらべ複雑であり，子音が重なり音節を構成していることが多い。しかし，それを絶えず聞いている二歳児のポールは子音を重ねることはないのである（表2）。

以上から，幼児のものまね上手なのは確かであるが，それは自分のできる範囲の枠に限られていることがわかる。

こうした研究は，成人においては多数の異なった類（形容詞，名詞，副詞等）に属する語であっても，幼児にとっては大人とは異った語類（pivot, open）を持っているにすぎないことを示したBraine（1963）[5]の研究や，幼児の文における意味関係をとらえ，その独自の形式を追求したBloom（1970）[6]の研究などにみられる。

では，このできる範囲の枠とは何を意味するのであろうか。

英語環境の二歳児のポールは，絶えず耳にしている／f／音あるいは子音の重なりは発声しないことを見た。また，筆者の子供は飛行機の「ひ」音がものまねできないことも見た。ここから，幼児のできる範囲の枠というのは，幼児のおかれた言語環境とは独立したものであることを示唆している。

このことを示す研究は，例えば，村田孝次（1960）において，「新生児ないし乳児初期には音素に言語環境特性の影響が見られないことは，アメリカの白人と黒人の新生児の間や日本人とアメリカ白人の乳児の間で示された」[7]と述べられたり，あるいは，ビルドメッグ（Vildomeg, 1971）が "Many of the first genuine words of chidren of different nationalities are also almost identical.（言語が異なっていても子供たちの初期にあらわれる単語の多くもまたほとんど同じ

である)"[8]と述べているように数多く見られる。これらは，いずれも幼児の音の仕組みの発達には，言語環境を越えた普遍性があることを示すものなのである。

こうした幼児の言語発達の普遍性を考慮に入れると，二言語環境の幼児が，発音の面で二言語環境特性が表われない理由は明らかである。つまり，どの言語環境に育っていようと，そこから幼児は同一の発音の体系を発達させているわけであるから，二言語環境にいようと，それには変わりはなく，単一言語環境の幼児と同一の音の体系を発達させているからである。

この体系の具体的な形は，例えば，口の中を障害物なしにでてくる音か否か，声帯が震える音か否か，鼻に抜ける音か否かといった音を区別する基本的な単位，つまり，音弁別素という形で研究されるようになってきたが，今後の成果が待たれるところである。

次に，明らかに二言語環境特性と思われる幼児の混成文について考えてみよう。

先に，レオポルドの子供は，母親が英語，父親がドイツ語という環境に育ったため，二語文の言える頃（一歳八ヶ月頃）になるとドイツ語・英語の単語を無差別に発話にとり入れるようになり，その結果，all nass といった，英語とドイツ語の混じり合った文が生まれることを述べた。このような現象はレオポルドの娘だけの特殊な例ではなく，同じような環境で育った幼児に一般的に見られる現象である。

イメダージ（Imedadge）は，次のように述べている。

> The two languages of a bilingual child, to begin with, constitute a single verbal repertoire, and components of both languages are used indiscriminately in the young child's communication with adults.[9]

> 二言語環境の子供は，二つの言語からまず，一つの言語の在庫（verbal repertoir）を形成するようになり，そして二つの言語からの要素は大人と話す時には無差別に選ばれるようになる。

ところでこの様な混成文が表われると，幼い頃から二言語環境におくことの悪影響が心配されよう。

この心配は，例えばハワイへ移住した一世たちが話していた "No money nara no can yo（お金が無ければだめだよ）"[10]といった英語とも日本語ともつかない混成文を，やがて子供達も話すようになるのではないかという心配につながっている。しかしながら，これは杞憂にすぎないのである。それは次にのべるように，経験的に示されてきているからである。

まず，ヒルデガードの場合を見てみよう。

> When her English–speaking environment became wider because she got around more

and played with neighbor children, English became the language to which she responded more readily and the English elements of her vocabulary multiplied.[11]

(二歳をすぎて) 数ヶ月後，彼女が近所の子供達と遊ぶようになるため，英語を話す環境が (ドイツ語と比べ) 大きくなった時，英語が彼女がより答えやすい言語となり，語彙における英語の要素は過速度的に増加していった。[( ) 内筆者追加]

つまり，ヒルデガードの場合は二歳をさかいにドイツ語の要素は徐々に消えていき，やがて英語の単一言語者となっていったのである。レオポルドは，さらに彼女の英語はまわりの単一言語環境の子供と何ら劣ることがないと述べている。

ヒルデガードの場合は，父親はかたくなにドイツ語を子供に話し続けたが，それ以外の場面では全て英語という環境であったため，ドイツ語の要素は消えてしまったのだが，ある程度，量的に二言語のバランスがとれていれば，その環境の子供は，混成文から，急速に二言語併用者となっていくのである。

ロニャット (J. Ronjat) の子供ルイス (Luis) の場合が真にこの例である。

ルイスは，母親がドイツ語，父親はフランス語という環境に育ち，家族は生活の大部分をフランスで過ごしたわけであるが，"Bilingualism did not lead to backwardness in speech (二言語環境にいることは発話の妨たげになることはなかった)"[12]と述べ，やがて完全な二言語併用者となっていったことが報告されている。つまり，ルイスの場合は，家庭の中でたえず接している母親がまわりの環境と異る言語を話していたため，二言語の量的バランスがとれ，やがて二言語が自由に使いわけられるようになったわけである。

こうしたことは，ルイスにだけ起こったものではなく一般的現象であり，それをイメダージは次のようにまとめている。

After a short period at about 1.8 years, the two systems begin to separate until at about 2 years independent vocabularies are recognised by the child, and two independent grammatical systems are gradually formed.[12]

(幼児の) 二つの言語体系は，一歳八ヶ月頃から離れ始め，二歳頃にはそれぞれの語彙が子供達によって聞きわけられるようになり，やがて二つの別個の言語の体系が形成されるようになる。

ここから，二言語環境特性である混成文は，二語文を話す時期，数ヶ月にだけおこる一過性のものであるといえ，幼児のその後の発達には何ら心配はないものであることがわかる。

では幼児の混成文とはどのような性格を持っているのであろうか。

筆者の子供は，一歳六ヶ月頃まで自動車のことを「ブー」と言っていたが，二歳頃には「ドウチャ」ともいうようになった。つまり一つの事物に対して２つの言い表し方ができるようになった。同様の例は，「ニャンニャ，ネコ」「ワンワ，イヌ」と多数見られた。これらは，子供といえども一つの事物に対して一つの言い表しだけを結びつけているわけではないことを示している。

本質的には，これと同じ事が二言語環境の幼児にも，より体系的に起こるのではないだろうか。つまり，一つの事物に対して，少なくとも二つの言い表しを早くから，必ず結びつけていくということが起こるように考えられる。そして，この二つの言い表しは，ある段階までは，場面による使い分けがされず，無差別に出てくるととらえられよう。

成人における言語活動は，正確な発言あるいは文法にかなった発話をする能力（言語能力）を有するだけでは不十分であり，場面の正確な把握をして，適切な言語活動をしていく能力（言語運用能力）も必要としている。後者の能力は，例えば，見知らぬ目上の人には敬語を用いるとか，あるいは会議の席上ではスラングを用いないということが行える能力である。

こうした成人の言語活動に必要な二つの能力の発達にうち，二言語環境の子供においては，まず言語能力が発達していく。例えば，ヒルデガードの場合，二歳頃までは父親に対する場面では，ドイツ語の単語を組合せ，母親に対する場面では，英語を組み合わせるのだという言語運用能力はまだ発達しておらず，ただ，二つの言語を聞き，そこから一つの言語体系をきづき上げている段階としてとらえることができる。

こうしてみると二言語環境の子供の混成文は，大人の観察から混成文と言えるのであって，子供の側からは決して混成文ではなく，二言語から発達させた一つの体系から生み出された文といえるのである。したがってある時期（二歳前後）以降，場面による使いわけができる言語運用能力が発達していくようになれば，先のルイスのように二言語併用者となっていくし，ヒルデガードのようにほとんど必要としない語彙（ドイツ語）は消失していくのである。

以上から，音の発達におけるのと同様，語連鎖の発達においても，二言語環境の幼児は二言語を聞いているという意識もなく，言語の基本的な部分を発達させていると言えよう。

レオポルドはまとめとして “She adopted into her speech the features which the two languages have in common, and on the elementary level, English and German are very similar. (彼女は，自分の発話に二言語共通の特徴を受け入れていた。そして基本的には英語とドイツ語は非常に似た言語である。)”[13]と述べているが，これまでの考察から明らかなように「二言語共通の特徴を受け入れていた」とは，どの言語環境の子供にもあてはまる言語発達の普遍性とつながり，「英語とドイツ語は基本的には非常に似ている」とは，どの言語にも共通する言語の

普遍性を示すものである。

References

(1) Leopold, W. F. *Speech Development of a Bilingual Child Vol.* III. 1970. AMS Press, Inc. New york. p.184.

(2) Ibid., p.186.

(3) Geoghegan, S. G. et al ed. *Language Files.* 1979. Advocate Publishing Group. p.72

(4) Ibid., p.72.

(5) Brain, "The Ontogeny of English Phrase structures: The First Phase" *Language 39.* 1963

(6) Bloom, L. *Language Development.* 1970. MIT Press.

(7) 村田孝次「幼児の言語の発達」1968. 培風館. p.14.

(8) Vildomeg, V. *Multilingualism.* 1971 A. W. Sijthoff–Leiden p.25.

(9) Lewis, E. G. *Multilingualism in the Soviet Union.* 1972. Mouton. p.236.

(10) Nagara, S. *Japanese Pidgin English in Hawaii: A Bilingual Description.* 1972 The University Press of Hawaii p.108.

(11) Leopold, W. F. op. cit. p.181.

(12) Vildomeg, V. op. cit. p.25.

(13) Leopold, W. E. op. cit. p.p.186–187.